

想い出の温度

Prologue

Rick

宵闇に佇む、木々の影。

漆黒の天空に月はなく、微星の瞬きが大地を輪郭付ける。

刹那に過ぎゆく時の歯車。

陽の昇りを待ち焦がれながら眠りに就く広葉樹の深緑。

葉擦れのさざめき、水のささやき。風は流れ、森は語る。

ふと眼を開くと、その光景には一人の少女。

蒼に染まりつつある地平線を背に、明るい翠の瞳が彼方を見つめる。

それは、かつての彼女の姿。救いを必要としなかった姿。

風景の中に有る彼女は、それを重ねるにはあまりに違いすぎ
ていた

少女に救いを

Prologue end

朝日がカーテン越しに一日の始まりを告げる。

天空は曇り一つなく、朝露に濡れる木々の間を、雀のさえずりがふわふわと漂う。喧騒から少しばかりの距離を置く日本の休日の朝は、個人差はあるが皆一様にゆっくりとした時間軸を享受する。ただ、それは俺を含めるごく少数を除いて、だが。

「いつまで寝てんの〜！」

ひとつの呼び声と開けられる遮光幕。布団越しに蹴られる背中。

毎朝よくも飽きずに来るものだと変に感心しつつ、追撃を避けるため更に深く布団に潜り込む。

「こらっ丸まらないっ！」

がたがたがたがた

ベッドが振動する。おおかたベッドの足あたりを揺らしているのだろう。何とも手法が子供っぽい。と言うとまず間違いなく彼女の平手が飛んでくることになるので決して口には出さないが。

「いい加減にい〜…」

ばさっ。…呆気なく防具がはがされる音。

「起きろお〜！」

春先の寒気がまくれた袖の隙間から侵入し、布団によって保温されていた肌を容赦なく洗う。

「さ、寒っ！寒みい！ふ、布団かえせ！ってベランダに出すな
冷えるだろ！だいたいまだ8時じゃんか！もう少し…」

自分なりに精一杯抵抗を試みるも、

「だ・め。はい、とつとと着替えなさい。あたしは一旦部屋に
戻るから」

「はあ…」

どうやら今日も『ゆっくりとした時間軸』を享受することは
できなさそうだ。

朝一番、雨植（あまうえ）家の一日は、およそ半分くらいの
割合で起こしに来る汐織（しおり）の声が始まる。

俺が東京に出てきて、およそ半月。

首都の大学へ進学し、手狭な部屋を借りての生活。俗に言う
“地方”で育った俺にとつては些細なことが驚きの連続だった。

こんな不味い水でよく生活できるものだ。十日以上経った今で
も慣れることはない。

しかし、その中でも予想だにしなかったのが、目の前にい
るかつての同級生である。

「朝ごはん持つてくるからその間に身だしなみ整えとくのよ」

玄関を開けて隙間から顔を出し、そう言い置くと、再びぱた
ぱたと自分の部屋へ戻っていく。人間目覚まし時計といったと
ころだ。

都立白瑛大学1年、雨植あまうえ 翔流かける

一人暮らし歴、半月

慣れない都会生活に戸惑いなかなか勝手がわからないまでも、
現在なんとか普遍的な生活を送れているごく普通よりも少し要
領の悪い男。

生まれてこの方「普遍」という世界から脱したことはない。

どこにでもいる一般的な大学生として、現在は単身東京という
少々平凡を超えた立場に身を置いている。ただ、学科生の半分
以上は下宿や一人暮らしをしているというので、相対的に見れ
ば、そこまで非凡な環境でもないようだ。長男が故、いずれは
実家に戻るのがだろうが、その時までには目一杯都会生活を満喫し
てやろうと考えている。それが実現するかどうかは別問題にし
ても、だ。

もともと、そんな意気込みはどこへやら、たった2週間で充
実感とは縁遠くなった。証拠に、折角の休日だというのに起き
ぬけで思考が覚醒しておらず、ただ今絶賛空腹中である。それ
でアクションを起こさないのは、先ほどの彼女の言葉を信じ、
目の前のちっぽけな座卓に彼女の料理が並ぶことを微塵も疑っ
ていないことを証明しているのだが。

ガチャ

玄関の扉が開き、目覚まし時計が両手に料理を満載して部屋へ入る。「朝ごはんはしっかり食べる」という彼女の素晴らしい理念に基づいた彩色豊かな料理の数々。これだけの量をすぐに用意できるほど世界の物理法則は甘くなく、彼女が朝早くに起床している証拠だ。

「適当に並べといて〜」

軽く温め直したのだろう、湯気の立つ朝食をぼおくと見ながら、教科書とノートで埋まっていた小さなテーブルを片す。

1分もかからずに、俺のちっぽけなテーブルの上は、純和風の朝食御膳に彩られた。冷凍食品は一切なく、全て汐織の手作りのだ。さすがに一人暮らしが長いだけあって手際も味も素晴らしい。思い出。

都立白瑛大学2年、片内かたうち 汐織しおり

一人暮らし歴、不明。自称1年半と少し。

簡潔に言えば俺の幼馴染に当たるとはいえ、それは小学校に上がるまでの話で、中学進学と共に彼女は東京へ移った。そのころの汐織も俺に対する口調はあんなだったが、普段はどこかのお嬢様かと思うほど上品で人当たりがいいらしい。少なくとも新しい大学の友人は口を揃えて「理想の女性だ」と言う。まだその現場を目撃したことはないが、俺という時のあいつを

見る周りの目が驚愕に染まっていたことを見るとあながち嘘ではないのだろう。

俺が隣に住んでいると知ってから、つまり俺が引越すばを持っていった日から、あいつはなぜかちよくちよく起こしに来て、一緒に学校へ向かう。土日のどちらかは決まって朝飯を作って持ってくる。その時に起きていないと今日のようにたつき起こされるのは毎度のことであり、勘弁してほしいこともある。

才あり能ありの秀才だが、少々抜けたところがあるのが珠にキズ、というところだ。ちなみに俺は1年の浪人生活を経験しているのです、大学の学年上は彼女は一つ上ということになる。

ことつ

「あ…やっちゃった」

コップが倒れる。机の足を伝い麦茶がフローリングへ流れる。

「ごめん、タオル借りるね」

という彼女の手には既に雑巾代わりの温泉タオルが握られている。

——この部屋の配置を掴まれているのは信頼の証としておきたい。

「ごちそうさん」

「おそまつさま」

とてもおそまつには見えない朝食を終える。

汐織が食器を洗う流水の音を聞きながら、今日という休日の過ごし方についてのプランを立てる。

部屋の掃除、食糧の買い出し、自転車の修理、レポートの製作。すること、したいことには事足りない。このところ学校関係にかまけて自宅へ目を向けていなかったから今日1日かけてじっくり生活環境を整えてもいいかもしれない。これから4年度年間の基盤とするには、今の状態は少々問題が見受けられる。面倒だからと半月の間ほったらかしにしておいた罰だ。

思い出 まずは不用品をまとめるか。こんなに持つてくるんじゃないか
想 つた、と後悔するが、時既に遅し。

「ねー今日買い物に行かない？」

ん、何でだ？だってどうせ行くんでしょ？家具あたりを買いに。どうしてそれが？だってやっと片付け始めたから。どう見ても収納足りてないし。

確かに、現状では書籍と冬物衣料の収納場所が必要だ。特に持ち出した本は思っていたよりもスペースを取ってしまい、押入れの四半もの空間を取ってしまったている

「こういう機会に行かないとずっと行かないでしょ、翔流」

ごもつともです。

「ちよつと行きたいところ、あるんだ」

彼女はそう言い残して、洗い終わった食器と共に部屋を後にした。

空は程よい薄曇り。

寒くなく、暑くなく。

いつもはビジネスマンが行き交うスクランブル交差点に、若者と買い物客がひしめく、1週間に2日の全国的休息日。

服飾店、飲食店、娯楽施設、その他諸々：日曜の昼下がりはどこも人で溢れ、経済活動が右肩上がりになる。

汐織の案内で到着したのは、そんな都心を少しだけ外した、企業ビルの林立するオフィス街。もつとこう「若者が買い物する街」を想像していたのだが：

私たち浮いてるね？そうだな？なんて会話を交わしながら人とビルの林を南へと歩く。

「ああ、あそこあそこ」

汐織が指さす先に、少々くたびれた雑居ビルがあった。商社の事務所に挟まれたそこは、形容しがたい雰囲気醸していた。

ところどころ剥げた看板を見ると、

1 F…コンビニエンスストア「リンググマート」

2 F…インテリア・雑貨「Tropolisとアイロイス」

3 F…佐熊商事

4 F…同

5 F…同

6 F…司

とある。6階の案内は風化の気まぐれか、子供の悪戯か。

看板とビルを見比べる。

温度なるほど1階はごく普遍的なコンビニエンスストアだ。地元にはないローカルな系列だが。

見上げれば上階には煤けて割れかけた窓ガラスが連なる。時折覗く段ボールがこの会社の現在の経営状態を雄弁に物語る。

おそらくアレに中身はないのだろう。

しかし、視線を下げると…

「……………」

巨大な木造彫刻のオブジェと色とりどりの絵画に飾られたビルの窓。

およそ建築年数と釣り合わない原色彩色が黒銀のビル群にひとときわ異彩を放っていた。

「前から来てみたかったんだよね」

隣で目を瞬かせている汐織。

「前から、か」

「ん？何？」

……………」

こういった時の直感は、当たってしまうことが多い。

カランカラン

クマ鈴の歓迎を受けてそろそろと店内へと突入する。

出迎えたのは、現代の流行や文化に疎い翔流でもわかる、若い女性向きインテリア。

「うわあ…」

人工色に染め上げられた大小様々な品々が天井近くまで積み上げられ、店内に何本もの「天守閣」が建立されている。

隣の汐織女史は、放心の声をあげてふらふらとこの不思議空間を彷徨っていた。

『あ、お客さん』

『え…！』

店の奥から二人分の声が響いてくる。とはいっても、既にどこが奥でどこが手前なのかわからないので奥も手前もない。

オブジェの柱を縫うようにして、なんとか発信源へ向かう。

「はい、ユイの初接客、頑張ってね店長！」

「え、ええ〜…」

「そんなに緊張しなくても…」

「だ、だってだってえ〜」

「ここは今はユイのお店なんだから」

「ね、ねえ、やっぱしアヤ姉が行ってよ…ユイには無理だって」

「そんなことないよ〜いつもの元気なユイで行けばいいんだよ？」

「あう…」

「ほら、勇氣出して！」

とん、と肩を押されて物影から飛び出す少女。あ、あの、い、いらっしや、いませ、な、何をお探してでしょうか。

おそらく年は十代半ば、短身というより『ちっこい』という表現がしっくりくる、桜色のTシャツにワークスジーンズのシヨートカット。姿だけ見れば少年ともとれる活動的でボーイッシュな服装。それとは裏腹に借りてきた猫になってる女の子。目が合った。瞬時に真赤に沸騰して縮こまる。気恥ずかしさに耐えられず、翔流も目を逸らす。

「翔流〜これ見て…」

汐織が楼の合間を縫って翔流の元へと…。

「……………」

辿り着くと、そこには沈黙に支配された男女一組。

「えーと…」

しばらく目線を二人に往復させ、

「お邪魔しました〜」

ちがう！ちがうから！俺も何か混乱してるし！いやこれはどうみてもあれでしょう？いやそんなんじゃないから！翔流にそんな趣味があったなんて知らなかった。何の話！？君も何か言ってくれよ！

振り向くとそこに彼女はいなかった。

「いらっしやいませ。先ほどは失礼しました。」

先ほどの少女の飛び出し点から、長身の女性が現れた。件の少女はその背中に隠れて片目をこちらに向けている

少女の姉だろうか。整った顔立ちに浅葱色のワンピースが映える。肩までかかる栗色の長髪に澄み輝くライトブラウンの瞳。その佇まいは

「どのようなものをお探してでしょうか？」

「あ、その…」

汐織が口を開く。いつの間にか翔流の左隣に身を置いていた。

「この商品ってどのものですか？」

「そうですね…ほとんどはクリエイターの個人作品、特に海外

のインポート物を多数置かせていただいております。」

「こちらへどうぞ、と女性が汐織に店内の案内を始めた。実質的には彼女一人でこの店を経営しているように見える。」

「……………」

しまった。

取り残されて、再び沈黙の二人。

「あ、あの……」

口を開いたのは少女が先だった。

「あ、あうう——」

目を合わせると、また赤くなって縮こまる。

この淡い空気はまだしばらく続きそうだ。

想い出の温度

店内を案内し終えた女性と案内され終えた汐織が二人の元へ戻ったのは2時間余り後のことだった。

そう広い面積ではないのだが、収まっている品物の数が多すぎたのだ。

これほどの量の品物を管理する彼女の能力は尊敬に値する。

「翔流く帰りにちよこくつと荷物が多くなるかもただけど大丈夫だよね〜？」

満足です。と顔に書きながら被案内人が待機人に問いかける。

「帰り？」

「じゃあまた後で来ますね〜」

問答無用。翔流に話す隙を与えず、店の戸を超えた。

また後ほど、との女性の挨拶がどれほど彼を落胆させただろうか。

通りへと移った二人を迎えたのは、燦々と降り注ぐまばゆい光のカーテン。春先の陽気は道行く人々の心を軽くする。

「そういえばお昼まだだったね」

唐突にそう言う翔流の手を取って歩き出す。

ぐいぐいぐいぐい

「ちよっ！おい待て引つ張るな！どこ行くんだよ？」

「どこって……お昼」

到着したのは、

いやちよつと待てそこすげー混んでんじゃん！どこも同じだからいいの！いやそれにしても列が半端ないって！今から他のところ行くのめんどいしさ！そういう問題なのかよ？そういう問題なの！がっちりと手首をホルドされずると連行される翔流。

こういった場面で翔流の抵抗が成った試しは過去を見る限りなし、今回もご多分に漏れることなく彼女の言いなりである。

ありふれた都内のファストフード店。

休日の昼下がりに相応しく、店内の飲食スペースは親子連れでこった返す。

「じゃあ適当にヨロシク」

入ると同時に座席奪取紛争に突入する汐織。

手元にはいつのまにか握らされた500円硬貨1枚。

眼前に広がるのは曲線をも描く人の列。

「……………」

結局、二人が昼飯にありついたのはそれから30分、汐織が半ば強引に窓際のカウンター席を確保してからだった。

「あと2軒くらい回りたい店あったんだけど今日はいいいから、ここ出たらさっきの店に即、直行ね。」

「結局俺の買物物はなしになりそうだな。で？何買ったんだ？」

「え〜とテーブルセットとテレビ台と…」

待て、それ今日持って帰るつもりか。うん。無理だろ絶対。

そんなことないって！翔流が頑張れば！いや俺一人頑張ったところでどうにもならんだろそんなの。だから頑張れって。意味わかんねえよ。呆れる彼に笑顔の彼女。

なんて言っている間にも食は進み、ものの15分ほどで腹ごしらえを済ませた。

ティータイムで再度混雑してきた簡易食事処から脱出し、重い気を纏った翔流は身体を引きずるようにして、元来た道を辿

る。

「こんにちは〜」

さつきとは打って変わって揚々とドアをくぐる汐織。

「ああ、いらっしやい。品物は搬入口のそばまで出しておきましたから」

ありがとうございます。じゃあ翔流よろしく。いや待てだから無理だろ。今日中に運んでくれればいいから。何往復させる気だ？ん〜4往復ぐらいで済むかなあ。そこで冷静に返すな。

まあとにかく頑張れ、うん。これはお前のだろうが。あ〜車出しましょうか？いえいいですコレが全部持ってつてくれるんで。何で俺がこんなことをせにやならんのだ。ほら、男の子だし。いやそれなら汐織も…。何か、言った？いえ、何も。

「こちらです」

建物の裏手に回って汐織の《購入物》を確認する。

今にも崩れそうな段ボールの小山が倉庫の壁に寄り掛かっていた。よくもまあこんなに買ったもんだ。というか部屋に入るのか？どう見ても一人暮らしには多すぎる気がする。

はしやぎながらそれらを一一つチェックする汐織。さながらプレゼントを貰った子供だ。

「確かに全部あります。じゃあお会計を」

かしこまりました。翔流く運びやすいように適当に荷造りし

といて。再び建物に入っていく二人。取り残される一人。

翌日の筋肉痛に苛まれる自分の姿を思い、翔流はここ最近で一番大きなため息を吐いた。

「はあ…はあ…はあ…」

汐織の部屋へと続く桜坂を、巨大な段ボール箱がユラユラ登る。

温度の出の想い、
どうの昔に息は切れ、足元が怪しくなっている。にも関わらず、

「なあ、俺何かしたか？」

足元から目を離さずに汐織に問いかける。先刻から何も話さずに後ろからひたひたとついてくるのはいつもの彼女ではない。気にせずにはいられなかった。さっき階段で角を引っかけたのが悪かったのだろうか？あれは不可抗力だ。

「……………」

ああ、そんなはずがないことはわかってるさ。

再三の呼び掛けにも答えない。何かを悩んでいるようにも、何も考えていないようにも見える。もつとも、大量の段ボール群を相手している翔流には彼女の表情を見る余裕などなかった

が。

広葉樹に囲まれた小さな公園。翔流は道を外れ、無言でそのベンチに座る。

「……………」

汐織は翔流に付いてくることなく坂を上り続ける。明らかに様子がおかしい。

「汐織！」

「え…？」

叫びにも近い呼びかけでようやくこちらに気づく。

「ご、ごめん、ぼーっとしてた…」

「——なあ」

「え？」

「…辛いか」

「っ！…や、やだなくいきなり何言い出すの？私は別に…」

「この場合は、普通は『辛いのはあんたでしょーが』と返すものじゃないか？少なくともいつもの汐織ならそう返すよな」

「え…？」

「あの店」

「っ！……………」

ああ、凶星か——

わかりやすい、奴だ。

最初は偶然だと思っていた。

ただ、気になったのだ。

よもや部屋に入りきらないほどの家財道具。

一人暮らしには到底不要なものさえその中に含まれば否でも疑わざるを得ない。

「Irohis…結構無理矢理だが、組み替えれば『shiori』だ。」

「……………」

「あの店は、汐織の親が経営してるのか？」

「——あたしの左目のこと、話してなかったよね」

「…汐織？」

「最初は、小さな雑貨屋だった」

小さく、小さく、呟く。

想い出の温度

「親戚に話さずに、家族とおばーちゃんだけでやってたんだ。」

「昔、さ。ちよつとばかり新聞を騒がせたこと、あつてさ。」

懐かしむ声。そこに暗闇が宿る。

「母子が、父親から暴行を受けた事件、知ってる？」

知ってるはずないか、翔流ん家つて新聞とつてなかったもん

ね。寂しく笑う。

「それってさ、ウチだったんだよ。」

「さんざん酔った末におかーさんを殴って、あたしがとばっち

り受けて。今は懲役刑で服役中。」

自業自得だよ。馬鹿みたい。哀しみと嘲りを内包した力無

い笑み。

「でもさ…どうしても変わらないんだ」

「どれだけ憎んでも…憎んでも…」

「私は一生…どんなことがあつても…」

「父さんと母さんの娘、なんだよ…っ！」

「あの二人の、子どもなんだよ…」

溢れ出る雫、止まらない言葉。

「この絆は絶対切れないから…」

「だから…知り合いが店を出すつて聞いて…あの場所を紹介し

たんだ。」

店の名前を引き継ぐことと引き換えに、そこに家族が^{わたしたち}あつた

ことを繋ぎとめるために、

思い出が詰まったあの部屋を、手放したんだ――

どれほどの時間が目の前を過ぎ去ったのだろうか。

太陽は地平線の上辺へと近づき、人のいない公園を紅に染める。

すでに、二人の姿はない。

泣き疲れて眠ってしまった汐織は、翔流が部屋まで背負っていった。もちろん彼女の部屋の合鍵など持ち合わせておらず、想い出の温度
今は彼の部屋のソファの上だ。

その彼は、大量の物資の運搬作業に追われている。結局残りの品は車で公園まで運んでもらい、一つづつ移動させては、隣の方々のご迷惑にならない場所を探す、という作業を繰り返している。事情あれど、これらを保管するということは彼女の頭の中に――なかったんだろいうな。

公園から全ての段ボールがその姿を消した頃には、残光すら残されておらず、街路灯の無機質な白色が熱の残るアスファルトを照らしていた。周囲の家々からは夕飯を作る匂いが流れ、

遙か頭上には数多の星が瞬く。

春先の柔らかな風を頬に感じつつ、自室への階段を登る。心地よい疲労感ならよかったが、今日は少々疲れすぎたようだ。

晩飯を何にしようかと思いついたところで、自分の部屋の換気扇が回っていることに気づく。まさか。

「あ、おかえり。今日はお疲れさま！」

笑顔で労いの言葉をかける汐織。

ただ、その、

「あー、早速だが一ついいか？」

「なに？」

「何で、汐織が、エプロンして、俺の部屋の台所に、立ってるんだ？」

目の前の光景に呂律が回りきっていない

「何でって、晩ごはん作ってるからじゃない」

うん、それは解るんだが……

「えーとあのな、その理由を聞いているんだ、うん」

「それは……ほら、荷物運びお疲れさまってことで」

本日の功労者は休んで、ほらほら。部屋に上がった翔流の背中を押す。

会話になってない会話と交わして答えでないような答えを受け取りながら、ベッドに腰を下ろす。力尽きたとばかりに膝が

笑いだす。このままいくと明日は間違ひなく悲惨なことになる。
そんなことにすら意識が回らない。

台所に戻り、何かの歌を口ずさみながらフライパンを返す汝織。

その姿は、とてもさつきまでの彼女とは思えない。幻を見ていたのかと考えてしまうほど、いつもの汝織がそこにいた。

相変わらず切り替えの早いやつだ。いつもならそう思っていただろう。

だが、もう彼女の姿は半月前のそれとはかけ離れたものになってしまった。彼女の背後に潜む過去を知ってしまった。闇に塗り込められた時間と記憶は、彼女を永遠に苛み続けるだろう。グリルで青魚が焼きあがる。小鍋には二人分の味噌汁。二つの茶碗に二人分の銀シヤリ。湯気薫る青椒肉絲。

「ごめんね」

誰に宛てたものか、料理を並べる彼女がポツリとつぶやく。その頬には新しい雫がひとひら。

片方にしか流れないそれを見なかったことにして、翔流は箸を取った。

Epilogue

沈みゆく暁の光を受け

黄金に輝く丈長い草原

大地に根を張った緑の剣

その切っ先の一つ一つが

それぞれの未来へと手を延ばす。

何物をも受け入れ

何者をも突き放す

“寡黙な聖地”

救いを求め来たりし者は

小さき鍵を手にして去る

繰り返される出会いと別れ

幾億の交わりの先に――

あとがき

はじめまして、Rickと申します。この度は「思ひ出の温度」をお読み下さり、ありがとうございます。

処女作を無事書き終えて達成感に浸りつつ、筆を進めています。お題の「キャラ縛り」ですが、汐織シオリです。他のキャラも使いたかったのですが非常に灰汁が強いキャラばかりでしたので自分の筆力では参入させることができませんでした…

では物語について少し触れてみたいと思います。時は21世紀、舞台は東京。暗い過去を持つ少女を、旧友の目線から描く、ファンタジー要素のない凡々なお話です。またいずれ機会を見てこの物語を完結させたいな〜とっております。このままでは消化不良では収まらないので…。

あ、そうだ、自己紹介しなかったですね。

情報理工学部 機械情報工学科の1年です。趣味はパソコンと自転車。真っ赤なロードバイクに乗った妙な男がいたら自分かもしれない。

ご意見、ご感想はBIT文芸部門へどうぞ。具体的な活動日、活動日時は別記してあると思います。

では、またどこかでお会いできることを願って。

平成20年6月27日